

私の戦争体験

セントポール君

日本航空株式会社に入社し、国際線客室乗務員として世界の空を飛び、その後企業における新入社員教育、各種学校就職セミナー講師、博覧会のスタッフ教育を担当。

私が乗務していた1980年代半ばから1990年はイラン・イラク戦争真只中で、イラン上空を飛ぶものは民間機だろうとなんだろうと撃墜するとイラクが宣言し、民間機も危険だということで、飛行ルートを変えた記憶があります。

平和な日本から一歩外に出ると戦争をしている国があるのだ、ということを感じた瞬間でした。

当時は「南周りヨーロッパ」といって、バンコック(タイ)、デリー(インド)、カラチ(パキスタン)、アブダビ(アラブ首長国連邦)、ムハラーク(バーレーン王国)、クウェート(クウェート)、ジェッタ(サウジアラビア)、カイロ(エジプト)、アテネ(ギリシャ)と、長い路線がありました。

私達乗務員も、日本を出発し、それぞれの場所にステイ(滞在)して14日から18日間は帰国出来ない乗務ルートでした。

日本で報道されていた第一次湾岸戦争(イラン・イラク戦争)、第二次湾岸戦争(多国籍軍・イラク戦争)の場所を通過していくこのルートを飛ぶということは、平和でのんびりした日本からいきなり戦争近隣国上空を飛ぶわけで、何とも言えない違和感がありました。

特にバーレーン滞在の折、家に葉書を出したところ、ちょうど新聞でその近辺で戦争を行っているという報道だった為、両親が驚いて、日本航空がなぜそのような場所を飛ぶのかと、帰国後にはかなり仕事を辞めるようにと言われたものです。

実際にバーレーンそのものは平和な雰囲気です。石油王国の活気溢れる街でしたが、ちょっと砂漠の中へ車を走らせたところ、突然砂漠の中から巨大なレーダーや、武器や、ミサイル発射台などが見えてきて、それがすべて同じ方向を向いていたのが非常に不気味で恐ろしかった記憶があります。

さて、1985年3月12日、当時のイラクのサダム・フセイン大統領は「3月19日の20時30分以降、イランに入る飛行機はイラク空軍が無差別に撃ち落とす」と宣言し、事実上空を封鎖したのですが、その時点でイラン在住の日本人は約300名が残っており、今か今かと救援機を待っている状態でした。

タイムリミットが迫る中、どの国も自国民を救う飛行機を出し、または陸上の逃げ道を確保するのに必死でした。日本航空は以前から邦人救出のために飛行機を飛ばしてきましたが、この時は政府と日航との話し合いが上手くいかなかったのか、組合が強すぎたのか、当時新人の私にはよくわかりませんが、結局日本人救出のための救援機としてJALは飛ばなかったのです。その代わりに、なんとトルコ航空が飛んでくれたのです。突然名乗り出たトルコ航空は、

自国民よりも日本人を優先して座席を確保してくれました。自国民は陸でも逃げられるといい、2機のうち最初の飛行機に全部日本人を乗せてくれたのです。トルコ航空の乗務員も、いつ墜されるかわからない恐ろしく危険な中で、日本人救出のために乗務を志願してくれたと聞きました。なんだか、日本航空で働いていた人間として、バツが悪いような気持ちになり、またトルコ人の心意気に大変感激したものです。

実は、その理由を後から聞いて驚きました。なんと今から120年も前の出来事と深く関係していたのです。

軍艦**エルトゥールル号** (Ertuğrul Fırkateyni) 当時のオスマン帝国(トルコ)が所有する軍艦の名前。親善訪日使節団として来航した年が1890年6月7日、明治天皇に皇帝新書を奉呈し、日本側も熱烈に歓迎した後、帰途の途中で台風遭遇、和歌山県串本沖、紀伊半島檜野崎で座礁し、587名の命が失われた。灯台に流れ着いた生存者を大島村の人達が必死に救助し、自分達も台風により食料がなかったにもかかわらず、献身的に介護したことにより69名が助かった事件。詳細は在日本トルコ共和国大使館のホームページに出ています。

トルコ大使館記載 <http://www.turkey.jp/jp/ertugrulfrigateJP.htm>

この軍艦エルトゥールル号遭難事件での日本側の対応に対して感動をしたトルコがその後教科書に載せて、トルコ人ならだれでもが知っている出来事となり、多くの親日家を生みだしてきたという経緯が土台にあって、それから95年後のイラク戦争で、日本人の救助機へと繋がっていったわけです。

その後第一次世界大戦では日本が連合国側についたのでトルコとは敵国となりましたが、それよりも以前の恩を忘れずにいたトルコ国民の心の中に、日本人への温かい思いが存在し続けていたという事実、私は、「武器よりも強いもの、それは真に相手の国民を想う気持ちである、それは結局、安全保障へも繋がる」ということを証明してくれたように思います。

さらに教科書に載せる意味というものは、戦争に関して言えば、事実を事実として自分達の記憶として留めるだけではなく、相手国を思いやれる気持ちになるように載せるものでなければなりません。つまり、罪をなすりつけたり、憎しみ合ったり中傷したり、傷つけあったりするためではなく、自分の非も認め、相手を思いやり、お互いに尊敬し合えるような事が書かれることが、未来への国と国との新しい関係を生み出す上で必要なのではないかと思います。その意味でも大変意味深い「トルコ航空邦人救援機」でした。